

“新地歴科時代”とシュタイナー学校

齋藤 毅

西ドイツのシュタイナー学校を体験的に紹介した、子安美智子の『ミュンヘンの小学生』（中公新書）を、新鮮な驚きをもって読んでから、もう10年余りになる。最近はその教育を受けた女史の娘さんが体験記を同じ新書にまとめているので、誰でも容易に、この教育体系の輪郭をつかめるようになった。

当時は、徒らに奇を衒うようにさえ思われがちだったその教育理念やカリキュラムも、シュタイナーの著作が次々と翻訳され、彼の思想と共に、教育理念がかなり体系的に研究されるようになるなど、今ではようやくわが国の教育学界でもシュタイナー教育は認知されはじめています。

最近、シュタイナー学校の地理教育に関する文献を読む機会があったが、期待に違わず、大変興味深いものがあった。ここでは、小学校低学年に一種の「生活科」があって、5学年になると「地理」や「歴史」にわかれていくのである。地理教育が「郷土研究」から出発するところなどは、一見、日本の社会科教育の方法を思わせるが、明確かつ体系的な教育理念に貫かれているところに決定的な異なりがあると言えよう。

5年生からの「地理」は、一種の世界地理である。「……地理に理解をもって取り組む人は、世界の中で共に生きることを学ばなかった人より、はるかに愛情深く周囲の人間に接することができます。彼は他の人々と共に生きることを学びます。他の人に対して気を配ります。こうした事柄は道徳の育成に強く働きかけます。そして地理を遠ざけることは、隣人愛への反感しか意味しないでしょう（『自由への教育』）」と言うのが、彼の教育理念における「地理」の位置付けである。

このような理念に貫かれた地理教育では、シュタイナー教育の特性の一つとも言うべき感覚やイメージを

最大限に重視した手法で進められていく。なかでも興味深かったのは、クレヨンなどを用いて、色々な国々の“絵図”のようなものを徹底して描かせることである。こうした下ごしらえの後に、6学年では、“山歩き”などの一種のフィールドワークを通じて植物や岩石などへの親しみをもたせつつ、自然地理を、やはり感覚を通して学ばせ、それらの感触や知識を布延させつつ世界の諸地域における自然環境の理解を促していくのである。

さらに、日本の中学生の年齢に相当する7・8学年では、世界の諸地域の経済や文化など、抽象度を次第に高めていくが、その際、特に旅行記のようなものが多く用いられ、あくまでも感性の働きを重視するところに大きな特色があると言えよう。

わが国の教育界では、現在、「地歴科」の設置に伴う高校社会科の解体が多くの論議を呼んでいる。確かに、短期的にみれば、「世界史」の必修化による「地理」の受けるデメリットは少なくないかも知れない。

しかしながら、もし、この解体政策を本格的に進め、これまでの余りにも没理論的なわが国の小学校社会科教育を廃し、このシュタイナー教育にみられるように、小学校高学年から地理学や歴史学の認識論に立って、各々本格的なカリキュラム開発を目指すならば、地理学や歴史学が本来的にもつ豊かな教育作用によって、地理教育の復権が可能となろう。環境問題、資源問題、異文化理解など、単にわが国ばかりでなく、全人類の当面する諸問題に一元的に立ち向かえる新たな教科として、「地理」は社会的に期待され得るものとなるに違いない。

（東京学芸大学）